

二〇二〇年八月一日

明智寺京射千の紅一花

よう子

人を見ぬ奥社に居るは蚊ばかりぞ

はく子

屯してキャンプ村めく梅雨茸

せいじ

川渡る舟に喪服の黒日傘

素秀

玉雫して観音の指涼し

うつぎ

二〇二〇年七月二五日

入道雲立ちし高さに城址あり

うつぎ

サイダーや空を飲み干す瓶の底

よう子

紙芝居 BGM は 蝉時雨

素秀

零ならばスコアボードや雲の峰

なつき

今年また出番昭和の扇風機

菜々

二〇二〇年七月一八日

アイロンの折り目涼しきユニホーム

そうけい

山腹へ棚田の展ぐ青田道

わかば

連格子透かせて蓮の花浄土

うつぎ

光秀の首塚供花は花桔梗

ぽんこ

梅雨晴間愛車の手入れ怠らず

せいじ

二〇二〇年七月一日

吹き渡る松風涼し廃寺跡

小袖

遠会釈日傘を上げて応ずなり

わかば

館出でて一斉にさす日傘かな

そうけい

ランプの灯映す窓辺の濃紫陽花

小袖

瞬きに翡翠消ゆる中洲かな

なつき

毎週句会秀句・みのある選・二〇二〇年八月一五日